持ってない男

前川美和

青野昌也は目覚まし時計のアラームを止めながら、「きょうは早出か」とつぶやいた。ノロノロと起き上がり、新聞を取りに行って、冷蔵庫からアイスコーヒーのボトルを出し、グラスに注ぎ新聞に目を通す。歯を磨き顔を洗い、パジャマ代わりのスウェットの上下を脱いで、洗濯してハンガーに干したままのTシャツを着て、車で職場に向かう。日によって出勤時間は異なるものの、判で押したような毎日が繰り返される。彼は三十六歳の介護士。泉南の特別養護施設で働いている。

昌也は関東の私立大学の商学部を出た後、一応就活はしたが、どこからも内定はもらえず、仕方なく地元に帰ってきた。昔から勉強らしい勉強はしたことがない。大学も自分の偏差値で入れるところを探して入った三流の大学。当然のように学費も親に出してもらい、大学生活を適当に送った。何に対しても興味を持てなかった。勉強、アルバイト、友達、恋人、どうでもよかった。地元に戻ってから、介護の現場なら仕事は見つかるかと思い、福祉専門学校に入り介護福祉士の資格を得て、今の職場に就職して丸十年になる。同僚たちは五年勤めたらケアマネージャの資格を取って、より条件のいい施設に移っていくが、そんな資格を取ったところで、さして給料が上がるわけでもないし、第一、ケアマネージャーにならなくても、ここにいれば食べるのに困らない。彼は酒もたばこもギャンブルもやらないし、スポーツや音楽といった趣味も持っていない。一緒に飲みに行ったり遊びに行ったりする友達もいないから、お金は出ていかない。薄給でも全く不都合がないのだ。

昌也は夜勤明けはもちろん、次の日の公休日も昼過ぎまで寝た後は、新聞を読んだりテレビを見たりして、基本的にはどこにも行かないし、何もしない。この前テレビで「ナマケモノ」という動物の生態を見た。一日に葉を数枚食べるだけで、あとは極力動かないでエネルギーを使わず生きている、とてもエコな動物だと紹介されていたが、彼の眼には理想的な生き方に映る。

今日、久しぶりに大阪へ出張した。「介護における心理的なケア」がテーマのセミナーだったのだが、「机上の空論」に思えた。有能なリーダーがいて、介護する側の人数が充足していてはじめて、利用者への心配り等の心理的なケアができるのだ。現実には少ないスタッフで回していかなければならず、流れ作業的なケアにならざるを得ない。利用者のわがままに付き合い、糞尿にまみれる現場を思い浮かべるとうんざりした。またそんな狭い空間で同僚たちがお互いに悪口を言い合っているのがバカげて見えた。他人との関係に何かを期待しているその甘さを嘲笑った。はっきり言って、頭のいい奴は介護職など選ばないのだ。まあ適当に力を抜いて流していかないと、介護の仕事は続かない。

いつもよりずいぶん早く駅に着いたので電車を降りて歩いていると、初秋の日常の風景が広がっていた。ガードレールから下を見ると、川が流れていて、大きな鯉が数匹ゆうゆうと泳いでいた。川べりに降りて行ってしばらく鯉を眺めてから、川に沿って歩いていると、芙蓉の花が咲いていた。芙蓉は背丈も高くなるし、ピンクの花も割合大きいのだが、

おとなしくて地味な感じがする。昌也の好きな花の一つだ。
何気なく花の中を覗いてみると、裸の女の子がちょこんと座っていた。キラキラ光る目でこちらをじっと見つめていると思ったら、次の瞬間、ニコッと笑った。虫じゃないのかと何度も目を擦ってみたが、どこから見ても女の子だ。昌也は恐る恐る女の子を手の平にのせた。何の疑いも持たないまっすぐな眼差しは昌也の目をとらえ、かたくなな心を打った。
思わず女の子をそっとジャケットの胸ポケットに入れると家路を急いだ。家についてポケットから出してみると、その女の子は安心しきってぐっすり眠っていた。フリースのマフラーを引っぱり出し、布団代わりにして寝かせてやった。

昌也は時間のたつのも忘れて寝顔を見つめていた。いつまで見ていてもあきることはなかった。今まで誰にも感じたことのない愛しさが体を満たした。芙蓉の花の中にいたから、その女の子を「ふうこ」と呼ぶことにして、昌也は一所懸命、世話をした。
小さな手袋を買ってきて服を作ってやり何を食べるのかわからなかったので家にとりあえずあったりんごを小さく切ってハチミツをかけたものを与えた。ふうこはほんの少しハチミツを舐めて、りんごのカケラをシャリシャリ食べた。

ふうこが来てから昌也の生活は一変した。仕事に行くとき以外はいつもふうこと一緒に過ごした。ふうこをポケットに入れて散歩に出ることも多くなった。ポケットのふくらみと重さは昌也にほほえみをもたらした。ゆっくりと景色を見ながら歩くと、今まで気付かなかった色々なものを発見した。池の中に立って獲物を狙うサギ、その声のけたたましさ。日なたぼっこでもしようと我勝ちに池の縁に集まる赤首のカメたち。葉っぱをムシャムシャ音を立てて食べる蛾の幼虫。小さな生き物たちの「生」を全うする姿に「皆、がんばってるな」とふうこに声をかけた。鳥や虫だけじゃなく、しゃべらないけれど、自分を信じ必要としてくれる存在を得て昌也は幸せだった。

ある日、ふうこはいつものようにハチミツとりんごを食べた後、動かなくなった。しばらくすると肩から柔らかい羽が生えてきて、それが大きく広がって体全体を包み込んだ。ふうこは目を閉じて眠っているようだった。昌也は小さな箱に綿を敷いて、ふうこをそっと寝かせ、様子を見ることにした。冬の間ふうこはずっと眠ったままだった。

昌也と言えば、職場で忙しい日々を送っていた。クリスマスや正月は一般の人にとっては家族が集まり、その絆を再確認する伝統的な楽しい行事だ。しかし、施設の利用者たちには年末年始に受け入れてくれる家庭のないことが多く、余計、孤独を実感させられる季節なのだ。そんな時期を少しでも笑顔で過ごしてもらいたいと思い、昌也は頭をひねった。殺風景な施設の外観に電飾してみようと、利用者と職員が協力して、案を出し合い限られた予算でサンタやトナカイや星などの飾りを買って、皆で取り付けた。夜になると白、黄、青、ピンクなどピカピカ光り、「ここは皆の家だよ」と温かく迎え入れてくれるような感じがした。
それから正月が終わって日常が戻ってきた頃、軽度の障害を持つ利用者たちを何人かず

つのグループに分け、日時などを決めた上で近くの温泉に連れて行った。温泉側にも協力してもらい、一般人の少ない時間帯に入れてもらったのだが、炭酸水や薬湯に浸かり顔をピンク色にほてらせた利用者たちはニコニコしていた。

一時だけの楽しみかもしれないけれど、それでもいいじゃないかと思う。人毛は生を受けたら、どんな状況でも死ぬ時が来るまで生きていかなければならない。その中で些細なことでも何か楽しいことや好きなこと、大切な人などに出会えればラッキーな人じゃないかと昌也は思う。彼は自分の人生を振り返って「俺は何か見つけられたのかな」と自らに尋ねていた。

昌也の心の変化は利用者への関わり方や仕事への取り組み方の変化となって表れ、それに伴い、周囲の昌也を見る目が温かいものに変わってきた。

四月になり、やっと春の兆しが感じられるようになったある昼下がり、眠っていたふうこの目がパッチリ開いた。ゆっくりゆっくり羽を広げると、薄い透明な羽に日が当たり虹色に輝いた。ふうこは大きな欠伸を一つすると、昌也に微笑みかけた。昌也が「おはよう。やっとお目覚めかい。きれいな羽が生えたね」と話しかけると、ふうこはコクンと頷き、自慢気に羽をパタパタさせて、フワリと飛び上がった。フワフワ飛んで昌也の方に留まった。昌也はふうこが外に飛び出して行ってしまわないように、慌てて部屋の窓を閉めた。ふうこは「あれっ」というような顔をしたが、自分が生活している部屋の中をいつまでもフワリフワリ飛び回っていた。

昌也はふうこを外へ連れ出したら、いなくなってしまいそうで、散歩もしなくなり、窓を閉めきって、家でテレビを見たりゲームをしたりして過ごす日が続いた。ふうこは昌也の膝の上で眠ったり、肩に座って一緒にテレビを見たりしていた。以前のようにりんごを食べることもなくなり、窓のあたりを漂う時間が長くなった。

昌也には、ふうこの気持ちが痛いほどわかった。せっかく得た羽で自由な空間に飛び出したいのだろう。頭ではふうこを空に放してやるべきだと分かっているのだが、初めて手にしたこの小さな宝物を手放す気にはならなかった。己の利己心をのろいながらもふうこを失うことを想像するだけでも気が狂いそうになった。こんな感情は初めてだった。昔同棲していた女がある日突然いなくなっても、「ああ、そうなんだ」と思っただけで、悲しみも感じなかったし、追いかけようとも思わなかったのに。

何も口にしなくなったふうこはだんだん元気がなくなってきた。羽の色も褪せてきて、目の光も消えつつあった。ある日、昌也の頭の中にふうこの声が響いていた。

「わたしを自由にして！」

かぼそい声が震えていた。

「嫌だ。おまえは俺の大切な宝物なんだ」

「大切なら・・・」

「ずっと一緒にいようよ。初めてなくしたくないと思える存在なんだ。おまえは」

「分かるわ。あなたは何も持ってなかったもの。あなたの心は空っぽだった」

「空っぽ？」

「あなたの目には何も映ってなかった」

「今はおまえがいる」
「わたしは・・・。わたしじゃだめよ」
「じゃ、何が？」
「それは、あなたが・・・」
「・・・・・・・・・・」
「あなたは変わったでしょ」
「ああ」
昌也は窓を大きく開けはあった。
ふうこは青い空気の中にフワッと飛び上がったと思うと、次の瞬間すっと消えてしまった。
昌也はふうこが消えた空を見上げ、何回か目を擦ってみた。
「持ってない男・・・か」
昌也は少し笑った。

春らしいポカポカ陽気のある日、小さなアパートのベランダに置かれたプランターに、色とりどりのチューリップが咲いている。狭いベランダだが、四角や丸いプランターにパンジーやハーブが植えられている。佐山由紀子がベランダに出て来た。たばこをくわえ、長い髪をかき上げながら携帯をいじっていたが、ポイと放り投げると、遠くに目をやった。今日は少し霞んでいるが、正面に山が重なって見える。「あれは何ていう山だっけ」。大きく伸びをしながら、しばらく山を眺めていた。ふと赤いチューリップに目をやった。そっと中を覗くと裸の小さな女の子がちょこんと座っていた。由紀子と目が合うと、その女の子はニコッと笑った。

（了）